

## 学 位 論 文 要 旨

### 研究題目

Current clinical practice for familial adenomatous polyposis in Japan: A nationwide multicenter study  
(日本における家族性腺腫症の手術症例、非手術症例の長期経過:後方視的多施設共同二次研究)

兵庫医科大学大学院  
医学研究科 医科学 専攻 器官・代謝制御 系  
下部消化管外科 学 (指導教授 池田正孝)  
氏 名 松原 孝明

【はじめに】家族性大腸腺腫症 (FAP) において日本の遺伝性大腸癌診療ガイドラインでは 20 代での大腸全摘術を推奨している。しかしながら、大腸全摘術後は機能不全や脱水などで QOL の低下がみられることがある。日本において近年、非密生型 FAP や attenuated FAP では、頻繁な内視鏡でのフォローアップを行うことにより、大腸全摘術を回避、または遅らせるといった試みがなされている。

【目的】本研究は、大腸癌研究会遺伝性大腸癌委員会の『FAP に関する後方視的多施設共同二次研究』から FAP 患者の手術施行例、非施行例の長期経過を明らかにすることを目的とした。このデータは大腸癌研究会参加施設のうち FAP を専門とする 35 の施設より後方視的に収集された。

【方法】大腸癌のない非密生型または attenuated type の FAP 患者 250 人を対象に分析した。その中で大腸切除術を受けた患者 (n=142) (グループ A) と大腸切除術を受けていない患者 (n=108) (グループ B) の間で比較をした。

【結果】患者背景について、性別、FAP 診断時の年齢、最終フォローアップ年数について有意差はみられなかったが、ロストフォローについては、グループ A が 48 例 (34%)、グループ B が 22 例 (20%) でグループ B が少なかった (P=0.003)。最終フォローアップ年齢に基づく大腸切除率は 29 歳以下で 46%、30~39 歳で 60%、40~49 歳で 54%、50 歳以上で 65% であり、大きな違いはなかった (P=0.1)。大腸癌の発症率は、グループ A が 35 人 (25%)、グループ B が 24 人 (22%) で違いはみられなかった (P=0.67)。しかし、その中で大腸癌が Tis 段階で診断されたのはグループ A で 12 例 (34%)、グループ B で 21 例 (88%) でありグループ B に多かった (P<0.01)。デスマイド腫瘍の発生についてはグループ A で 14 例 (10%)、グループ B で 1 例 (1%) みられ、グループ A に有意に多くみられた (P<0.01)。生存に関して、グループ B では全ての患者が最終追跡年まで生存していた。対照的にグループ A ではデスマイド腫瘍 3 人、大腸癌 1 人を含む 6 人の患者が死亡した。

【結論】日本で非密生型 FAP (ポリープ ≤1000) 患者の 3 分の 1 以上が 30 歳以上で大腸切除術を受けていなかった。大腸切除術なしでフォローした患者は、大腸癌の早期発見率が高く、デスマイド腫瘍発症率が低かった。徹底的な内視鏡フォローを行えば、非密生型や attenuated FAP 患者において非手術もひとつの選択肢になる可能性がある。本研究は後方視的研究で追跡期間は 13 年であり、より長期の追跡調査の結果が待たれる。